

〔織錦舍隨筆〕<sup>上</sup>ちひさき水鳥

寛政六年の夏、下總の國銚子浦に遊びけるに、その浦人寺井節之がいひけるは、八とせばかり先  
つ年の秋、この川口えめなれぬ鳥あまたむれ來りぬ、其形はまたく鴨のやうにて、羽のいろあひ  
も鴨にことなることなく、首あをきもまだらなるもありて、足はすこし長きかたにて、大きさは  
雀などよりはちひさし、波の上にあまたうきゐたるを、人々とらへ來て、或は池にはなちあるひ  
は水舟などにいれおきて、もてあそびものとせり、さて廿日ばかり有つるに、ひと日雨つよう降  
て風はげしく吹ければ、いづれの家なるも、いづち行けん皆なくなりぬ、年老たる人などにたづ  
ねけるに、昔よりかゝる鳥の來けんことはいひもつたへずとなんかたりける、

〔甲子夜話九十四〕林曰、我が宅ハ城溝ニ接スル故ニ、冬春ノ間ハ園池ニ水禽ノ來ルコト、日々ニ百

ヲ以テ數フ、夏秋ノ交東池ヲ穿擴メ、益々多ク來ルヲ謀ル、然ルニ去冬ヨリ此頃マデ、丁亥二月日

日凡四五十計、多キモ七八十ニ止リテ、遂ニ百ヲ超ルコト一日モナシ、何故ニヤト不審ニ思シニ、

頃日管絃ノ友ナル人來リ庭ヲ觀テ云、年來某ノ許ニ玉川ノ郊ヨリ來ル老農アリ、其者窃ニ水鳥

ヲ捕テ鬻グ、去冬ノ初某ノ許ニ到テ、今年ハ水鳥少シ、必大雪アルベシト云、コレ水鳥ノミナラズ、

秋渡レバ小鳥モ甚少シ、幾十年前ニカ、ルコト有シガ、久シブリニテ同ジサマ也ト、果シテ去臘

大雪ニ回、今正月六日ハ雪深サ二尺ヲ過グ、此都ニハ珍シキコトナリシ、園池ニ水禽ノ少キハ宜

ナル哉ト云レシニゾ、始テ心ヅキケル、禽鳥ハ氣ノ先ヲ得ル者ナレバ、雪深カルベキヲ豫メ悟リ

テ、我邦ヨリハ赤道ニ近キ度數ノ地ニ渡レルナル當シ、是マデ一向ニ心得ザリシコト也、

〔倭名類聚抄十八〕<sup>族體</sup>冠 文選射雉賦云、朱冠師說、冠、訓佐加、

毛冠 野王按云、鸚鵡頭上有毛冠、

毛角 爾雅注云、木兔毛、鷓而毛角、今按毛冠、毛角、和名皆與冠同、但獨立謂之毛冠、雙立謂之毛角耳、

冠鳥體